薄明。7時18分。シギショアラ付近。

ルーマニア紀行

1. ブクレシュティ

夜行列車

11時頃ノックの音で起こされる。ハンガリー側国境の町ルクシャゾで、出国審査だ。先ほど検札の時パスポートを女性車掌に見せながら手続きに関し訊いたとき、英語を話さない彼女は身振りで、「ドアに鍵を掛けて置けば良い。」みたいな感じだったが、やはり一応は顔改めと云うことだろう。

審査のためか半時間ほど停車後に国境を越え、今度は11時40分にルーマニアのクルティチで入国審査で起こされる。両方とも審査官が男だったので、寝床から出て身繕いするのも面倒に思い、パンツ姿で失礼した。いずれも簡単に済み、朝になって車掌が切符と一緒に返してくれたパスポートには出国と入国のスタンプが捺されていた。切符などを預かったのはこの出入国審査手続きを円滑に進めるためらしい。

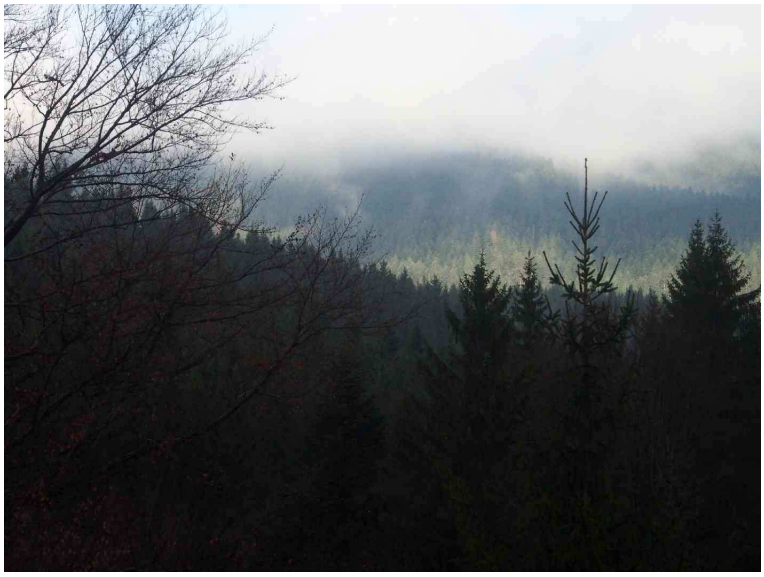
寝台車でも快適に眠ることが出来たが、それでも何回か目を覚まし、最後に地平線が明るみ始めていることに気付いた。時計を見ると7時13分だ。ちなみに計算上の日の出時刻は7時20分だった。ベッドの窓際に坐り、次第に開けて行く車窓風景を眺める。地形はなだらかだが割に複雑な起伏が続き、畑、牧草地、荒れ地が入り交じり、ときおり教会を中心とした村が出現する。

何回か停車を繰り返すうちに、駅舎の壁にブラショフの文字を見て閃くものがあった。ブラショフはルーマニアで訪れようかと（未定だが）考えている6箇所ほどの候補地一つだった。ブダペストからブクレシュティへ列車で行くについて、どのような経路か調べきれずにいたが、少なくともその一つを経由することが判ったのだ。

ちなみにブクレシュティ到着後に調べ直したところ、他の訪問候補地、シギショアラ、シナイアも経由していた。つまり効率的にはかなり無駄な動きをしたことになる。しかしこれを後悔したかというと逆で、仮に判っていても首都ブクレシュティを眺めてから順次地方へ行く方が収まりが良いと思う。

閑話休題。ブラショフを発車してしばらくすると線路は上り勾配になり、山中に分け入って行く。気温が下がったのか霧が深くなる。登り詰めたところで停車したのはプレデアルで標高は1000メートルを越えている。ルーマニアでは有数のウィンター・リゾートらしい。

線路は一転し下り勾配となり、霧も薄れて行く。200メートルほど標高が下がったところで停車した。駅舎にはシナイアの文字が見える。



ブクレシュティに到着した列車。機関車が替わり、車両編成が短くなっていた。

18時間半の長い列車旅は、それほど疲れることもなく、退屈もせず終わった。寝台列車の有り難いところだ。11時40分の到着は途中に線路工事区間があったため、多少遅れたようだったが、「定刻」を調べていなかったし、現在は運行ダイヤが変更になったため調べようがない状態だ。

ともかくホームへ降りて列車を振り返った。すると機関車は替わり、編成もすっかり短くなっていて、ブダペストでは少なくとも8両だったのがいまは4両のみだ。ルクシャゾで半時間も停車したのは、出国審査よりもこの車両編成替え作業に要したのだろう。

ブクレシュティ

ともかくルーマニアでの第一歩を踏み出した。駅から宿のアムゼイまでは2キロほどで、道が判らないことからすればタクシーを利用したいところだ。しかしこの街は雲助タクシーが多いらしく、特に空港や中央駅界隈は悪評が高い。幸い天候も良いし時刻は早い。英ガイドの地図を参照しながら宿へ向かった。ところが肝心の所が地図の繋ぎ目で判り難い。後でGPSの軌跡を調べたら、良い線を行きながら、一本早すぎる角を曲がってしまったせいで次第に参照している地図と周囲の状況が合わなくなって行く。

こんな時は無理せず訊くに限る。バイク屋と楽器屋で教えを請うとどちらも親切で、しかも流暢な英語を話す人がいた。宿がだいぶ近くなってから、再び英ガイドの地図を参照していると、今度はマウンテンバイクに乗った若者が向こうから声を掛けてくれた。何とも親切な人が多い。入国したばかりだから先のことは判らないが、何となく前途は明るいと思う。

若者に礼を述べながら、幾分気持ちにゆとりも出たので、現地通貨を全く持っておらず、キャッシングをした方が良いとの考えが浮かんだ。幸いすぐそばにCD機があり、第一回目のキャッシングは1,000lei(21,688円)となった。

泊まった部屋。

キャッシング後は総てが順調に行き、アムゼイに辿り着くことが出来た。5階建てで2階から上が客室となり、全部で22部屋（英ガイド）のこぢんまりしたホテルで多分個人経営だろう。外観も小粋だ。

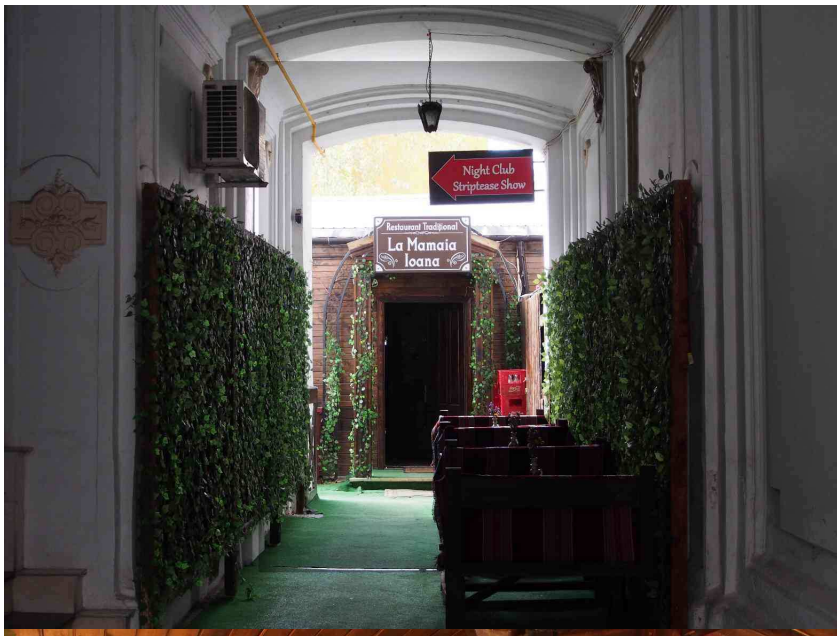
鉄格子の門扉が着いたゲートを入り、建物に沿って10メートルばかり行ったところに玄関がある。10畳ほどのエントランスホールから数段登ってロビーとフロントだ。頭上はなぜか5階床までの吹き抜けになっている。どうせなら屋根までにすれば良さそうなものだと後で思う。

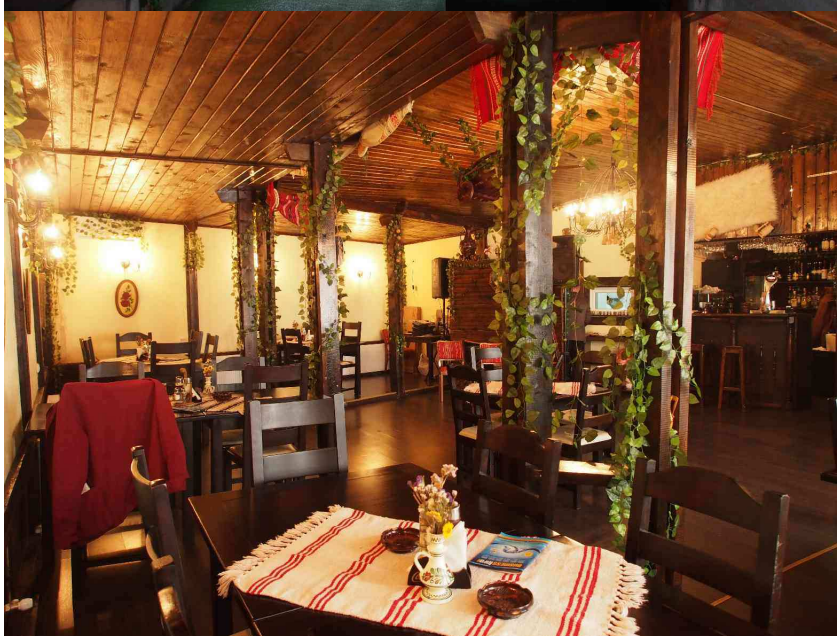
予約は簡単に確認でき、部屋を下見した。5（最上）階の北向きで、歩いてきたアムゼイ小路を見下ろせる。広々しているし、内装や家具などは（あまり泊まったことがないから良く判らないが）四つ星ホテルならばと思わせるものだ。

道路の向かいには7階建て程度の集合住宅が並び、視界はかなり閉ざされているが、街中なのでおそらく部屋を替えても同じ程度だろう。この部屋に泊まることにしてフロントへ戻りチェックインした。

荷物を部屋へ運び込み、30時間近い移動の緊張をといて寛ぐと、朝食抜きだったこともあり空腹感が頭をもたげる。英ガイドのお奨め食堂をみると、宿のそばにルーマニア料理のチェーン店ラ・ママがある。チェーン店であることには多少抵抗を感じたものの、手軽さに負けて此処を目指した。裏通りからさらに引っ込んだところにあるため、最初は見逃したが何とか辿り着く。

時分どきにもかかわらず、40人は入れそうな店内に先客はカップルが一組だけだった。既に食事を終えたのかタバコを吸っている。なるべく離れた席を選んで坐った。





上：ラ・ママの入口は、裏通りから建物の中に設けられて通路を抜けたところにある。ラ・ママの看板上には左へ行くとストリップの見られるナイトクラブとの表示があるが、どんな店か見えなかった。しかし付近に猥雑な雰囲気はない。下：店内。

上左：テンダーロインステーキ。上右：ミックス・ピクルス。
下：テンダーロインステーキの拡大画像。

考えてみると宿の部屋にも灰皿が置かれていた。ハンガリーでは全室禁煙か禁煙階が選べたのと較べると様変わりも甚だしい。喫煙大国ブルガリアに近い状態なのかもしれない。

それはさておき、お品書きを持ってきたのは黒スーツ姿でマネージャー風の中年男だった。併記ではなく英語版がテーブルに置かれる。せっかく郷土料理の店を訪ねたのに、なぜか選んだのはテンダーロインステーキだった。ペーチで美味いのを食べた余韻が残っていたせいかもしれない。サラダの欄からミックス・ピクルス、後はハウスワインの赤をグラスで貰う。

お品書きの各項目に重量が書かれているのはこれまたブルガリアと同じだ。ちなみにステーキは200㌘、ピクルスも同じだった。この量を見てスープなどはやめることにする。

ワインを飲みながらひたすら待つ。分厚いステーキをとろ火で焼くならば時間が掛かるのもやむを得まいと、ペーチでの体験も合わせて判断する。ピクルスだけ先に出して貰う手もあったかもしれないが、ピクルスだけでワインを飲みたいとも思わず、その替わりに皮がパリッと焼き上がって美味いパンをツマミにしながらともかく待ち続けた。

1時44分になりようやくステーキとピクルスが運ばれてくる。まず外観は申し分ない。皿の位置や向きを調整し急いで数枚撮影後、焼き加減や肉質を確かめるために、ざっくりナイフを入れていみた。これも極上だ。早速食べ始める。肉の味わいは濃厚だし、塩胡椒の加減も好みにぴったりだった。ワインを2杯追加し半時間弱でほぼ完食する。しかし両方合わせて400㌘はやはり多すぎたので、ステーキに添えられていたフライドポテトが若干残り、ピクルスのうち、カリフラワーは完食したものの胡瓜とペッパーはこれも残さざるを得なかった。

カプチーノで終わりにし、勘定を頼む。玩具の流用か、ちゃちなものだけれど宝石箱風のものに入れて勘定書がテーブルに置かれた。趣向として好きになれないものの腹を立てるようなことでもない。ともかくこれを見るとワイン200cc3杯18lei(390円)、ステーキ45lei(976円)、カプチーノ6lei(130円)、パン1.5lei(33円)。カードは駄目とのことで、75lei支払い釣りの4.5lei(98円)をテーブルに残す。

食堂を出ると、真っ直ぐ宿へ帰り昼寝する。窓の防音性能も良いのだろうが、下の通りは狭いので車は皆徐行するから騒音が室内に来ることはない。ぐっすり眠ることができた。

勘定書が入った小箱。

5階からガラス天井越しに中あき階段を見下ろす。ちなみに英ガイドはこれを「アトリウム」と呼んでいるが。通常はもっと大規模なものをさすようだ。ともかくこの階段は一階フロントの脇から始まり、4階で終わっている。5階へ通じるのはもっと貧弱で非常階段的なものが1階から通じている。5階と下の昇降は通常エレベーター利用なのでそのせいかもしれない。

夕方起き出して買い物に出た。アムゼイ小路を西へ行くと100メートルもないところに大型スーパーマーケットがあり、そのもう少し先にも小振りだが24時間営業のスーパーマーケットがある。街並みに上品さや洗練はないが、便利な下町なのだろう。

晩酌のツマミ用にロールパンとレバーペーストを買う。カード使用控えから14．5lei(314円)の買い物をしたことは判るが、上記二品の単価やそれ以外もあるのかは不明だ。

宿のほとんど真向かいにパン屋がある。角地に立地し、スタンドと云った方が良いかもしれない小さな店で、売れ筋は食パンではなく菓子パンや調理パン（そのまま囓って軽食になるようなもの）らしい。泊まっている部屋で窓際から見下ろすと、いつも6、7人の行列ができているので気になっていた。スーパーマーケットの帰りにみると、幸い2、3人の待ち人だ。列に並んで切り売りピザを一切れ購入した。これも控えがないので詳細不明。

部屋に戻りシャワーを浴びる。さっぱりしたのはよいが使用後にバスタブのところからタイル床の上を便器の方へ水が流れていることに気付いた。大した量ではないが、シャワーカーテンの締め方が良くなかったのか、あるいはシャワーヘッドの向きを誤ったか、ともかく反省しながらバスタオルなどで床を拭く。

しばらく衣服など着けないままインターネットでメールやフェイスブック、情報収集など。ネットカフェなどではなく、自前のPCを持ち歩く利点を改めて堪能した。メールなどに見るべきものがなかったとしても。

7時近くなって晩酌を開始した。切り売りピザは再加熱しなくてもそこそこ美味い。久しぶりのレバーペーストも良かった。短時間で飲み、この日も早々就寝する。大都会の中心部なのに、静かに夜が更けていった。

上：切り売りピザ。下：ロールパンとレバーペースト。右下に見える薄緑色のはジュールで購入したアウトドア用（？）プラスチックスプーン。

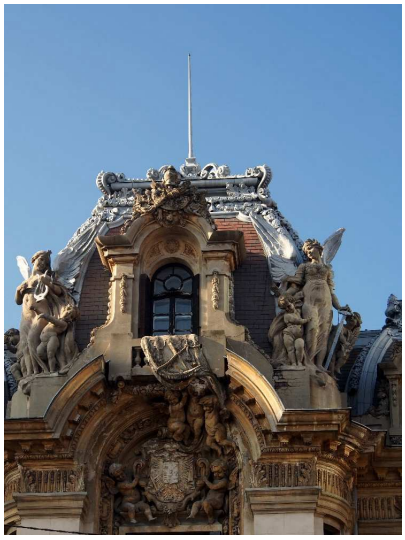
朝食替わりに食べたベーコンパイ。

バスタオルと洗濯物を浴室のタオル･ウォーマーに掛ける。

ヘラストラウ公園

4時頃に目を覚ましたが、起きてもすることがないのでうつらうつらと時を過ごした。6時に起床。暇潰しを兼ねて下着類を手洗いする。此処の浴室はタオル･ウォーマーが設備されているので、洗濯物の乾燥に好都合だった。

この宿をインターネット予約する際に、一泊当たり10€安い朝食なしプランにしたので、朝飯は自分で調達しなければならない。7時になりアムゼイ小路を見下ろすと、件のパン屋は開業したようで、ボチボチ客が訪れている。早速降りて行きベーコンパイ5lei(108円)を手に入れた。美味いとか不味いを云々するようなものではないだろうが、値段相応に食べることができた。



エネスク博物館ファサード上部。

9時半を回って街歩きに出かけた。日英両ガイドブックの地図を瞥見すれば、ブクレシュティの見所はほぼ南北に街を貫く幹線道路沿いにあるようだ。そこで基本方針として、アムゼイ小路を西へ行けばすぐにぶつかるヴィクトリア通りを北上し、街の北端とも云えるヘラストラウ公園まで行き、公園の散策と園内にある農村博物館の見物をする。その後、踵を返して南下し、宿の近辺よりさらに南へ。この辺りはヴィクトリア通りの沿道に由緒ある建物などあるらしいし、古い教会なども巡りたい。

方針の決まったところで身支度を調え出発した。時刻は8時半。なぜか気温を測らなかったが、10℃以下だったと思われる。しかし風もないし陽射しがあるからコートを着て歩くとちょうど良かった。

エネスク博物館。

ヴィクトリア通りを北へ10分ほど辿ったところで通りの西側に格調高い建物が姿を現した。鉄格子の柵と門に囲われ、様式的にはバロック建築だろう。4階建ての威風堂々たるもので、奥行きはファサードの4倍くらいある宮殿並みのものだ。公開されているらしいが、時刻が早かったせいかまだ入館できない。ともかく撮影だけして後から調べ直すことにした。

ジョルジェ・エネスク（George Enescu）
1881年8月19日～1955年5月4日。作曲家、ヴァイオリニスト、ピアニスト、指揮者、音楽教師。クライスラーやティボーと共に20世紀前半の三大ヴァイオリニストの一人と云われている。
彼の演奏は精神的な奥行きや格調の高さを感じさせるもので、ベートーヴェンやシューマンのソナタ、またバッハの無伴奏作品は、今も高く評価されている。
門下にはユーディ・メニューイン、アルテュール・グリュミオー、クリスチャン・フェラス、イヴリー・ギトリスなど錚々たる面々だ。
日本ではあまり知られていないようだが、ルーマニアでの人気は高く、5lei紙幣に肖像が使用されている。

その結果ルーマニア人の有名音楽家ジョルジェ・エネスク（コラム参照）の記念博物館と判明した。カンタクジーノ宮殿と呼ばれルーマニアで往時に最も裕福な男の一人として知られているゲオルゲ・グリゴール・カンタクジーノにより20世紀初頭に建築された。この宮殿を息子が相続したが彼の早世後、寡婦となったマリアがエネスクと再婚したため、エネスクはこの宮殿に住まうことになる。しかしルーマニアが共産圏になったとき、エネスクはパリに去ったためそれは短期間だったようだ。

ヴィクトリア広場。

閑話休題。エネスク記念博物館から10分足らずでヴィクトリア広場に出た。元々は広場だったのだろうが、現在は広場としての機能はほとんど失い、駐車場と、道路間に広々した空き地を持つ巨大交差点となっている。此処はまた旧市街の主要な二つの通りであるヴィクトリア通りとマゲル（カタルジュウ、マゲル、バルチェスクと名前は次々替わる）通りの起点でもある。

全部で3本の幹線道路が六差路を形成しているため交通量も多く、時間帯のせいもあろうがルーマニアでは珍しい渋滞（そうは云っても信号二回待ちぐらい）が発生していた。

自然史博物館。

直進を続けるが名前はキセレフ通りとなり、路肩に大幅な余裕のある相互一車線道路は並木があり、その外側は自転車道と歩道になり二つを合わせた幅は6メートルほどだ。道の両側は木立の多い緑地で、自然史博物館や農民博物館、地質博物館などが200メートルほどの間に建っていた。

いずれも質的に高い展示をしているらしいが、度々書いているように博物館は好まないので、外観だけを撮影して素通りしてしまった。しかしキセレフ通りは車道の通行量がさほどではなく、歩道は広いしその外側が緑地や公園になっているので、歩いて行くには気持ちの良いところだ。

ヴィクトリア広場から2キロ弱でロータリーになった交差点にぶつかる。ロータリーの中には凱旋門があった。

農民博物館。

ヘラストラウ公園

衛星画像でこの地域をみると、上流域も下流域も数多くの三日月湖状のものが観察され、河道域であったと推察される。現在公園となっている地域は、かつて湿地帯だった。1930年頃から干拓作業が行われ、その一方で堰と水門も設置され、ヘラストラウ湖やホロレアスカ湖を取り巻くように公園が造成された。面積は約187ヘクタール。

夏期には手漕ぎボート遊びや遊覧船なども就航するらしい。水辺に沿ってホテルやカフェなどもある。また1936年に開設された農村博物館には国内各地から200弱の農家や教会が移築されている。

凱旋門。

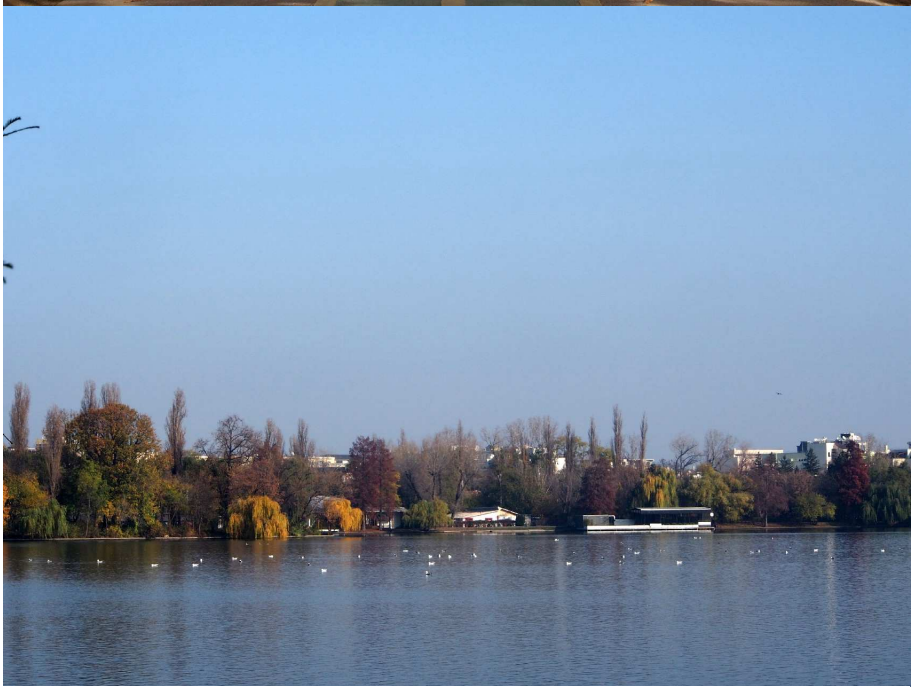
元々はルーマニアが独立した1878年に急造された木製の門が兵士達の凱旋を迎えたらしい。現在の凱旋門は1936年に改めて1918年の12月1日（ルーマニア建国記念日：トランシルヴァニアとルーマニアの統一）のモニュメントとして建造された。パリのエトワール凱旋門をモデルにし、高さは27メートルで基盤は幅25メートル、奥行き11.5メートルなので本家に較べるとスケールが二分の一ぐらいなのは、国力といったものを考えれば妥当なところだろう。

凱旋門が中心に聳えるロータリーは、変則的6差路で、5本までは幹線車道だが残る一本は他と変わらぬ道幅ながら歩道だ。ヘラストラウ公園のメイン道路となっている。此処から公園内に入った。

観光客風はほとんど見かけず、市民がのんびり散歩しているような姿がちらほら見えるものの、広大な公園内は至って閑散としたものだ。農村博物館は此処を訪ねた理由の一つだけれど、これを見る前に園内の散策をしばらく楽しんだ。

進入路の突き当たりから、当てもないまま緩い坂を下りると、樹林が途切れ視界が一辺に開けた。ヘラストラウ湖には水鳥が群れをなし、時々一斉に飛び立って入れ替わるように他の群れが着水する。

水辺を辿ってゆくと小さな橋があり、ヘラストラウ湖に細く突き出した半島状のところへ渡った。左側はヘラストラウ湖の一部だが、橋の下で本体と繋がるだけの、小さな池に見え、向こう岸に木造の教会が見えた。



上：ヘラストラウ公園の紅葉。下：ヘラストラウ湖。

農村博物館に移築された木造教会。

水面に映った鏡像と共に撮ればそれなりに絵になるだろうと安易に考えて撮影する。しかしモニターで確認するとつまらない画像だ。池を経巡りながら撮影を繰り返したが、中々難しいものだ。結局15枚撮った中で、一番ましだと思うものを左に掲示する。

池越しの教会撮影もさることながら、農村博物館も一通り見物しようと入口を探す。撮影を行った半島状をその根元まで行くと、水辺から博物館の外周柵が始まっている。これに沿ってゆくとすぐの所にゲートがあり、その脇に掲示された看板には（ルーマニア語のみで）料金などの表示と（英語併記で）開園時間やその他の注意事項などが示されているが、ゲートは閉ざされ人の気配もない。

農村博物館の裏木戸にあった表示。大人10lei、子供5lei、学生2.5lei、幼児、退役軍人、障がい者、無料、国際博物館会議、国際記念物遺跡会議、、文化省、博物館の専門家、無料。オーディオガイド50lei。ガイドツアー（ルーマニア語）200lei、外国語300lei。

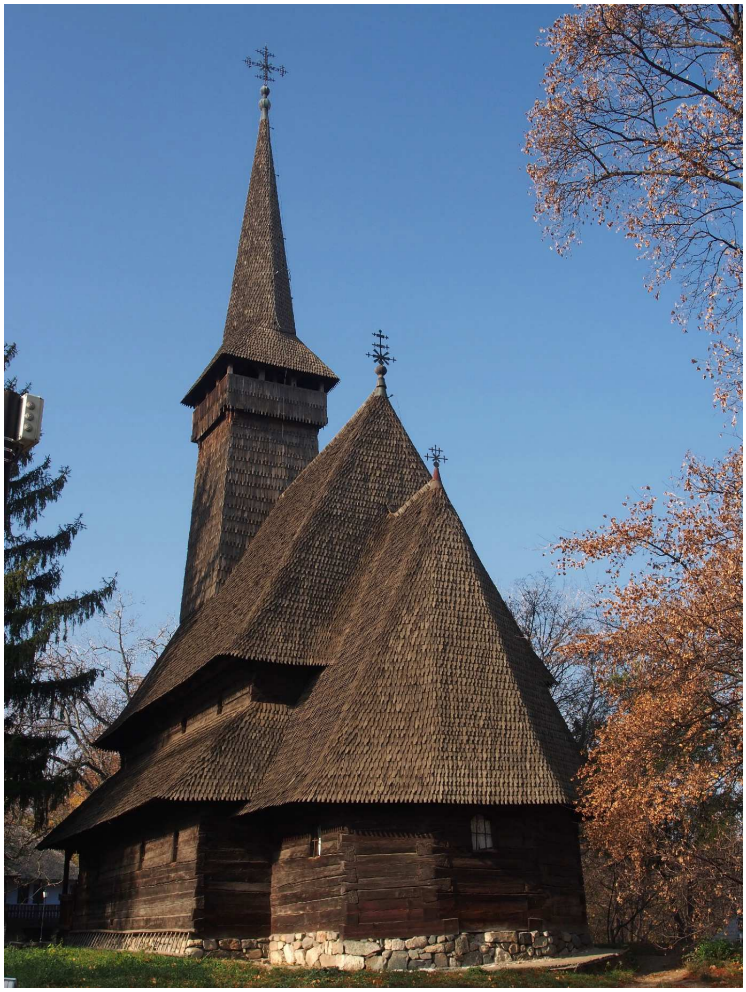
繁忙期のみ開くゲートならばそれは仕方ないが、此処が閉まっているときどこから入れるかの案内図ぐらい表示しても良いと思う。「呆け老人が何か見落としている。」のかと、念入りに周辺を見回していると、制服を着た係員らしいオヤジが巡回してきた。幸い英語も通じ、一旦公園を出て外周道路を3、4分ほど都心方向へ行ったところが入口らしい。

外周道路を2分ほど行ったところにゲートがあり門衛がいる。雰囲気が違うと思ったが、万が一此処が博物館だったら、後で戻ってくるのも癪だ。訊くは一時の恥だから彼に尋ねると、此処は文化省で博物館はもっと先だった。

改めて正規の入口に辿り着いた。10lei(217円)で入場券を購入する。農村博物館は1936年に民俗学者により設立されたもので、約8ヘクタールの敷地に、国内各地から移築された農家や教会が合計200棟ほど建ち並んでいる。

上左：一見、日本の茅葺き屋根のように見える。上右：接近して見るとかなり違う。
下左：教会の屋根はルーマニア版こけら葺き。下右：民家の門扉。

上：教会とは異なるこけら葺き。
下：こけら葺きの解説用サンプル。



教会。

遊歩道は石畳で舗装され、芝生の間に建物が散在していた。ほとんどの建物は19世紀頃に築造されたものと思われるが、大きなものや豪華さを感じさせるものはない。ルーマニアの農村が比較的貧しかったゆえに、それを反映しているのか、それとも裕福な所有者は建物を手放さなかったので、移築されたものが農村の実体とかけ離れてしまったのか、判定はできない。しかし何となく前者のような気がする。

建物は外観を見せるだけで、扉は閉まったままだ。しかし極一部開放されている部屋を覗いてみても、どこか空々しい作り物の感じがして、往時の生活を偲ぶような気分にもならなかった。

場内を歩いていてひときわ目を惹くのはやはり教会だけれど、これもまた物足りない気分になってしまった。内部を公開していなかったこともその一因と思われるが、それ以上に教会が持つ本来の役割と雰囲気、すなわち、「人々が祈りを捧げる場。」であることが、移築などにより失われてしまったように思われる。従ってホッロークーの教会などは規模として小さいながら、存在感としては勝っていたようだ。

ブクレシュティの盛衰

この地に植民都市ができたのは紀元前70年に遡る。15世紀には砦と壮麗な館が築かれ、軍事的要衝であり、また17世紀末までワラキアの首都だった。19世紀にモルドヴァと合同後はルーマニア公国の首都となる。19世紀後半から絢爛たる建造物で都市が整備され、「東欧の小パリ」などと呼ばれるようになる。

しかし1940年に起きた震災により多大な被害を受け、さらに第二次大戦では枢軸国側であったため、連合国の爆撃により多くの建物が破壊された。地震は77年にも起こり、かててくわえてチャウシェスクにより始められた1970年代半ばの体系化政策が「小パリ」への弔鐘となる。

ヴィクトリア通り

一通り見て廻ったものの、半時間強で農村博物館を出た。凱旋門ロータリーまで行き、キセレフ通りからヴィクトリア通りへと先ほど歩いてきた通りを逆戻りした。アムゼイ通りとの交差点から少し南へ行くと、ブクレシュティで僅かにかつての小パリを感じさせるような建物が散見される。まず左手に1888年に建てられたアテネ音楽堂が見え、これと通りを挟んで対峙するような位置に共和国宮殿がある。もとは旧ルーマニア王国王宮で、チャウシェスク時代には大統領府であったが、現在は国立美術館となっている。

アテネ音楽堂。

革命広場付近の大学中央図書館。

さらに南進すると大学中央図書館が左側に（多分）バロックの威風堂々たる姿を現す。その格調と質的高さは、とても大学の施設と思えない。日本の大学施設でこれに匹敵するものはなく、大学施設という制限を外しても、辛うじて赤坂離宮が挙がるくらいだろうか。ルーマニア繁栄時代の凄さが偲ばれる。

ヴィクトリア通りをさらに南へ辿ると、ちょっとした広場（公園？空き地？）の片隅に、煉瓦造りで特異な形状の教会があった。1722年創建のクレツレスク教会だ。ちなみに、「特異」とは私が見慣れていないという意味で、この様式はルーマニア正教として典型的なものらしい。ブルガリアで見た正教会にも通じるものがあるので、東欧正教会で括って比較分類しながら理解すれば判りやすいのかも知れないが、私には無理だ。

クレツレスク教会。

教会の内陣がヴィクトリア通りに面し、回り込んだところに入口がある。中に入る前にナルテクス（玄関廊）部分の天井ドームや壁に描かれたフレスコ画を眺める。かなり質的には高いものと思われるが、保存状態は余り良くなかった。

民主革命時の1989年12月21日の深夜、当局により実力行使が発令され、革命広場には戦車も投入された。その戦闘では数十人にも及ぶ犠牲者が出たという。この教会も被災しているので、フレスコ画もそのとき損傷したのかもしれない。

観音開きのドアから中へ入ると、入口の脇に小机が置かれ、青年が佇んでいた。聖職者には見えないからボランティアが交替で監視をしているのだろうか。彼に訊いて入場料がないことと、撮影ができることを確かめた。

内部のフレスコ画はナルテクスに較べ質、量、保存状態のいずれにおいても勝っている。しかし空間を埋め尽くす宗教画と、豪華に装飾されたイコノスタシスには息苦しささえ感じた。そもそも宗教画は聖書の知識か、ガイドなどの解説がないと何の場面だかさっぱり判らないし、純粋に芸術作品として楽しむほどの鑑賞眼も残念ながらない。そんなことで結局8分ほど堂宇内にとどまっただけで立ち去ることになった。

内部のフレスコ画。

チェルコル・ミリタル・ナチオナール。

ヴィクトリア通り南下を継続する。随所に格調高かったり古き良き時代を偲ばせる建物が現れる。CEC銀行や、元々は郵便局であった建物を転用した国立歴史博物館などはガイドブックで紹介されているが、それ以外の建物でも見応えのあるものが次々に出現した。

中でも面白かったのがチェルコル・ミリタル・ナチオナール（Cercul Militar National）だ。建物の軒下に掲げられた大きな文字を読めば、「国軍」が連想される。しかし建物は全体的に優雅だし、前庭には噴水まで設けられている。ともかく数枚撮影し執筆時に調べてみた。直訳すれば、「国軍サークル」だが、検索するとレストラン情報ばかり出て来て評判は良い。推測すれば国軍クラブであったところがレストランになったらしい。テラス席がよいとの情報もあり、現地にいたとき知っていれば、多分訪ねたと思う。惜しいことをした。

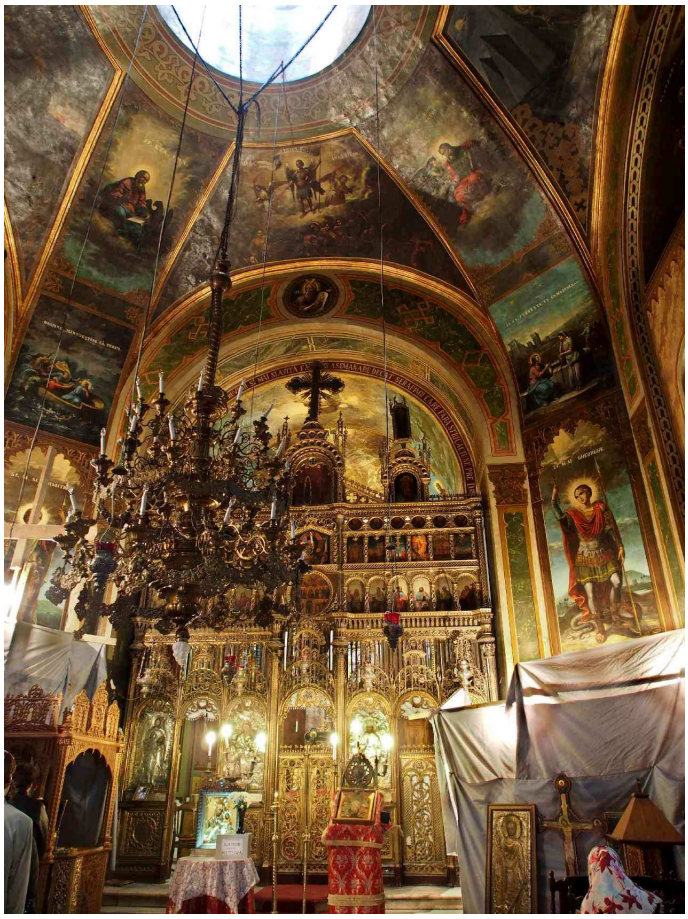
時としてヴィクトリア通りを外れて脇道を探訪してみる。地味だけれど格調高く堂々とした建物を見付けて近寄ると、ルーマニア国立銀行だった。いつ頃建設されたか判らないが、やはり中央銀行はその信用を誇示するために、粗末な建物では拙いのだろう。

やはりヴィクトリア通りからの枝道で、ちょっと離れたところから始まる瀟洒なアーケードがあった。期待してこれも探訪したが、延長はわずか60メートルで、U字型を描いてヴィクトリア通りへ戻されてしまった。

短かったアーケード。

アーケードの100メートルほど先にスタヴロボレオス小路がありこの奥にあるスタヴロボレオス教会は日ガイドが、「市内でもっとも古い教会の一つである。堂の入口上部や内部に美しいフレスコ画を配する。」と紹介していた。日ガイドは大袈裟な賛辞を呈することが多く、あまり信用はしていない。しかしこの教会ならば話半分でも見る価値がありそうだ。

通りから小路を100メートルほど入ったところにひっそりと佇む教会は、祠といった方が似合うかもしれない。幸い堂内に祈りを捧げる人もなく、撮影は許可されたので、比較的自由にあれこれ撮ることができた。


スタヴロボレオス教会の内部。

1897年に建設されたCEC銀行本店。

クルテア・ベケ教会。

ヴラド・ツェペシュ

ワラキア公ヴラド3世（1431年～1476年）、ドラキュラ公や串刺し公などと呼ばれたが、15世紀のワラキア公国の君主。ワラキアの中央集権化を推し進め、オスマン帝国と対立した。

ブラム・ストーカーの小説『ドラキュラ』に登場する吸血鬼・ドラキュラ伯爵のモデルの一人。現在は、ルーマニア独立のために戦った英雄として再評価されている。

再びヴィクトリア通りの南進を再開した。CEC銀行本店やその向かいにある国立歴史博物館など、いずれも重厚な建物だ。特にもと郵便局は、かつてヨーロッパで見たどこの郵便局よりも堂々としている。比較的小国で産業にも恵まれていないと思われるのに、なぜこれほどの遺産があるのか、不思議に思う。

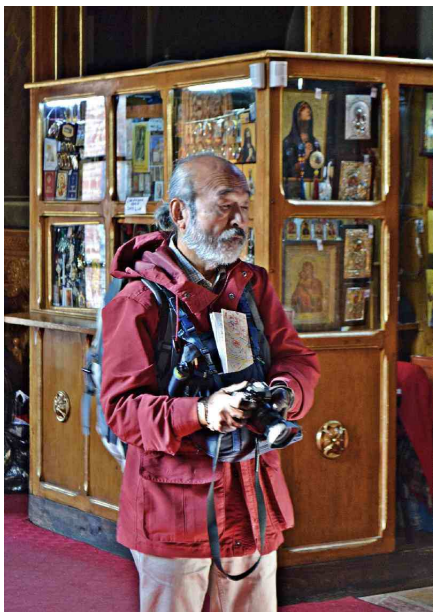
CEC銀行本店の少し先に川があり、川向こう辺りからが場末なのかと見切りを付け、川に沿って東へ向かう。対岸に見えた荘厳な建物は調べたところ最高裁判所だった。中央銀行などと共にやはり見かけを大事にするところは国を問わないようだ。

そろそろ昼食にしようかと、最初の曲がり角を左折してシェラーリ小路を宿の方へ向かった。この小路は一般車両の乗り入れを制限し、沿道には商店や飲食店が多く、テラス席を設けているところもかなりある。天気も良いことだし、食事処を探しながら歩くのは楽しそうだった。ところが最初の交差点で右を見ると、遺跡らしきものがある。急遽そちらを見物に行った。

あったのは旧王宮の遺跡で、15世紀半ばにワラキア公ヴラド3世が建設したものだった。しかし度々の戦乱や地震により破壊され、現在見られるのはつまらないものばかりだった。それよりも王宮のとなりの方が目を惹く。ブクレシュティ最古の教会で、煉瓦造りのクルテア・ベケ（Curtea：王宮 Veche：古い）教会だ。1559年に竣工したので、ヴラド3世の時代からはかなり下ることになる。

この教会も無料で入れたし、撮影に関する制限もなかった。観光客は多いが、祈りを捧げる人は目立たない。信仰の場ではなくなりつつあるのだろう。無信徒の撮影者としてはこの方が有り難く、フレスコ画やイコノスタシスなどを場所を変えながら撮影を繰り返した。同じようにあれこれ撮影していた中年男が接近したときに声を掛けてくる。日本製デジタル一眼レフNikon　D3100を持っていた。流暢な英語でこちらが日本人か確かめた上で、ビジネスのため欧米諸都市を旅し、日本を訪ねたこともあると話してくれた。

こちらとしては英語力の問題と、ルーマニアに関しては持ちネタが少ないこともあり、ともかくメールアドレスも書き込んである名刺を渡して適当に話を切り上げる。その日のうちに写真を添付したメールを着信した。署名を見ると、ネクラエ・ジュンク（Neculae JUNCU）さんらしい。


ネクラエ・ジュンク氏撮影。

エミール・ガレ風ガラス工芸品を扱う店。

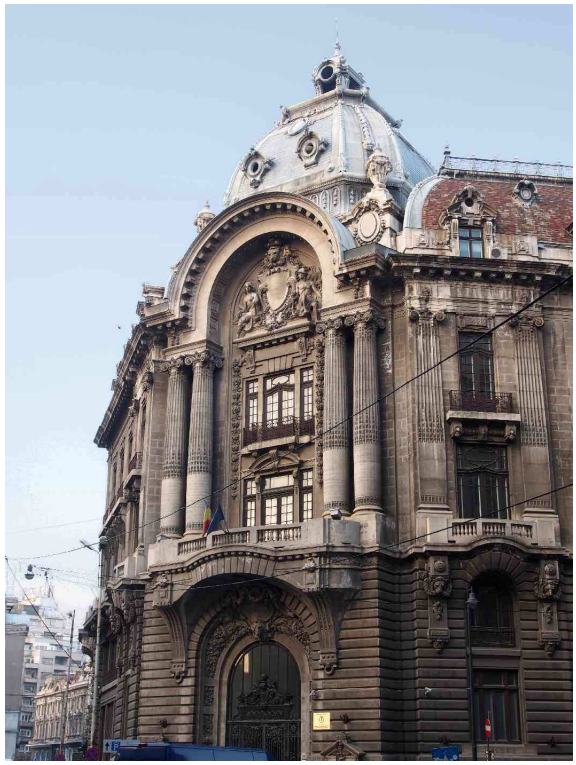
再びシェラーリ小路の北上を再開した。人通りが多く、商店やカフェの気取らない様子は下町の雰囲気だ。ショーウィンドーの卓上ランプが目を惹いた。明らかにエミール・ガレ風だ。路上に置かれた小さな立て看板には、produce Galle の文字が見える。

調べてみるとガレの弟子でイタリア人のモンテッシーが、妻の故郷であるルーマニアの地方都市ブザウに住み着き、ガレの手法を広めたらしい。「今現在一番忠実に再現されたエミール・ガレの作品は、ルーマニアで作られていると評価されています。」との言説もあるが、この商品をブザウから輸入している商社のものなので話半分か。

ランプその他のガラス工芸品は魅力的とはいえ、物価の安いルーマニアで買い求めても充分高価だし、おまけにこれから二週間も旅が続くのに、これを持ち歩くのは堪らない。撮影だけして店に入ることもないまますぐに立ち去る。

地図も見ないで適当に道を選んで北上した。方向音痴だから迷う可能性も高いけれど、ヴィクトリア広場から始まる二つの大通、ヴィクトリアとマゲルに挟まれた比較的狭い帯状の所を歩いているので、この大通を越えて迷走しなければ良いと思っていた。

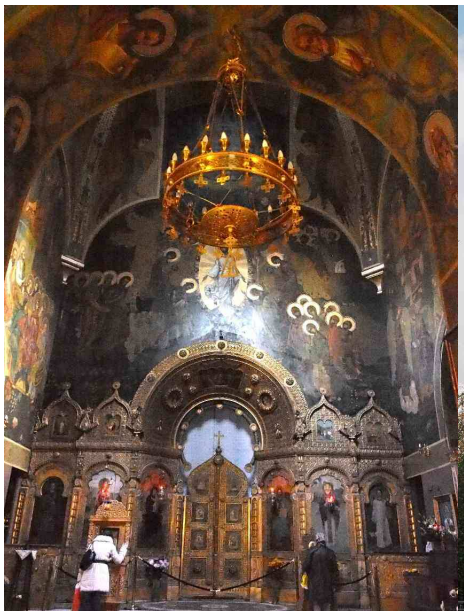
曲折を繰り返すうちに、先ほどその前まで行ったルーマニア国立銀行が彼方に見え、手前の角に(多分)バロックの立派ではあるが屋根を葺いた鉄板の赤錆で、その落魄を感じさせる建物があった。ガイドブックなどに記載はなく、グーグルマップの情報ではルーマニア図書館協会と出た。しかしこれは協会が店子になっていることを意味しているようで、建物の由緒は良く判らなかった。



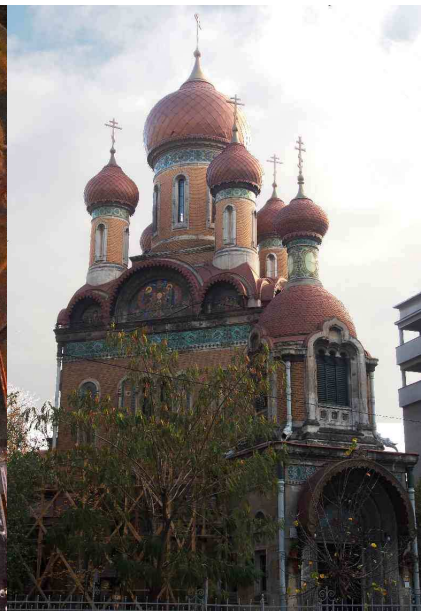
ルーマニア図書館協会の入居する建物。

この建物がある角を右折し、北西へ進むと、1ブロック先にネギ坊主の正教会があり、その名もロシア教会という。

幸い此処も開いていたので拝観する。拝観料や撮影制限などはなかった。ロシア正教とルーマニア正教の違いが何かは、さっぱり判らないのだけれど、少なくとも宗教美術の様式は異なるようだ(P.119参照)。しかしこのように少ないサンプルで比較を云うことは危険かもしれない。



ロシア教会内部。



ロシア教会外観。

ブクレシュティ大学。

ロシア教会を出てから若干道に迷う。ともかくヴィクトリア通りに出れば間違いないだろうと直進してみれば、レジーナエリザベータ大通りにぶつかり向かいにブクレシュティ大学の堂々たる建物があった。

大通りを左へ行き無事ヴィクトリア通りに戻る。時刻は2時を回ったので、昨日と同じラ・ママで食事することにして、撮影と周辺観察は継続しつつも食堂の方へと向かった。

店に着くと2時20分になっていた。相変わらず閑散とし、先客はカップルが一組だけだ。昨日いたマネージャー風の姿は見えず、変わってオバサンウェイトレスが三人いた。

英語お品書きから少しはルーマニア料理らしいものを選ぼうと、チョルバ（スープ）、ミティティ（肉団子）にあとはミックスサラダとハウスワインをグラスで貰う。

チョルバは東ヨーロッパ、中央アジア、中東、南アジア地域で食されているスープもしくはシチューの一種だ。ルーマニアの場合は、ボルシュという小麦主体の発酵調味料を使い酸味が付く。ルーマニアにおけるチョルバを言葉として考えれば、日本語での味噌汁に近く、具材により様々なバリエーションがある。今回食したのはチョルバ・デ・ブルタで牛の胃袋を使ったものだった。

スープ類なら予め作り置きしたものを温めるだけと思っていたが、意外に待たされ20分ほどして2杯目のワインを飲んでいるときに運ばれてきた。ストックと具材の旨味に酸味と塩味が上手くバランスし美味かった。

スープが片付きサラダも半分くらいになった頃、ミティティが登場。トルコ料理のキョフテを彷彿させる料理だ。トルコ料理も好きなので、ワインと共に気持ち良く食べ進める。最後はこの日もカプチーノで、1時間ほどの昼食を終了する。勘定はチョルバ10.9lei(236円)、ミティティ3箇9lei(195円)、サラダ6lei(130円)、カプチーノ6lei(130円)、ワイン12lei(260円)など。

宿へ戻り、フロントで帰国前日にこの宿で再泊する予約を試みた。ハンガリーでの経験からすると、ネット経由より直接の方が安いし、確実だとも云えそうなためだ。

空き部屋は問題なくあったが、値段の話になるとフロントの女の子はオーナーらしいオヤジを呼び出す。朝食付き通常価格85€を特別に69€にするという。Booking.comの安い奴だと68€だったが、部屋のランクがどうなのか良く判らない。ともかく直接予約した。

上：チョルバ。中：ミックスサラダ。下：ミティティと付け合わせのマッシュポテト。黄土色はマスタード。